

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023.10



## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二三年十月号（通巻七八五号）

■鑑賞・三好直太の歌 3 〈沙〉 久我田鶴子

15

■遊覧寄港〈向田邦子に恋して〉 米原千秋 44

45

◇今月の二十首詠……初期の歌・身の巡りの歌 本元由美子 2

■作品[A]

福田庸子・船田清子他

八田暁美他 4

A A

平山一子他 46

B C

林耕作他 56

A

大久保徳子他 70

C

白子友侑子・日吉睦子他 36

B

宮前英明・三浦美代子 16

D

大寺智子 19

E

今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

F

最近の歌誌より

〔編集部〕

G

「地中海社名簿 2023年度」について

61

H

虎谷信子歌集『葛屋のうた』

83

一 文学少女はとまらない 丸山 修

18

I

クリップ……84

神田通信……表3

J

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子 42

（表紙アザイン）Takao Kaga

## 初期の歌・身の巡りの歌

本元由美子

一九四五年生まれ。  
一〇一二年地中海入社。  
岡山支社所属。

冬日浴ぶ野積みの藁に母は座し吾のセーターに花を編み込む  
病篤き父に不幸のわび言へば「子を愛しめ」と笑みかへりくる

秋づける三日コスモスの花冷えて凡庸なる妻にも幸せ少し

鬱を抱き夏を越したるわが部屋に今宵優しく虫の音聞こゆ

いとけなき手に手に持つは彼岸花下校の児らを夕日が染める

過酷なる労働の果てのこの棚田人は見下ろし景観を言ふ

訪おとなへば氣の難しき兄に添ひ極暑の稻田に義姉は稗抜く

秋澄める川面に跳ねる小魚を磁場失ひし女がみてをり

花見にも紅葉狩りにも祭りにも常にひとりし異方向に行く

人は人わたしはわたし花見のこゑ響動めく窓を閉め採点す

如月の空に貼り付く月のあり子の就職は未だ決まらず

帰省子の街に戻りて静かなる門田の稻穂けさ出で初むる

子の結納に菜の花の咲く駅へ降りぬ司馬遼太郎記念館近し

ギブス取れし姑と並びて仰ぐ空鳶の一羽夕映えに舞ふ

あなたを溶かす呪文を鍋に煮詰めてはただ待ちをりぬ冬の黄昏

山登りモーツアルトに筍を好む夫なり 素数のことし

パッフェルベルのカノンが好きと言ふ夫は朝より飽かず数式いちる

天つ日にさざ波光る瀬戸を越ゆ曉に出で立ちし春遍路

早春のひと日阿波野を浮遊する山住みのわれ瀬戸を越えて

わが生きを問ふが如くに散り果てて落葉松の上の空はてもなし

# 作品 A

藤田美智子 運も不運も

・新

からまりし糸はゆつくりほぐすべし熟深き息子のシャツたたみゆく  
雲ひとつなき青空を仰ぎみよ君の寂しさはきみだけのもの

聞きたきをたうとう聞かすじまひなり音なく窓を漏らしゆく雨  
ひたひたと時は進みぬ音の鳴る時計はとうに家より消えて  
葉脈を透かしたる桂の葉を見上ぐひとときわれを素に戻しつつ  
耳たぶの大きさが決めるわけぢやない運も不運もめぐりゆくもの  
傷つかぬやうに保てる距離ならむ夏のゆふべの風心地よし

福田庸子

森の掟

・今

夏の午後舗装路をゆく猫の背の角張る骨に照りつける陽は  
シャツの皴すべて伸ばせりアイロンの余熱はいまだはるかなる日日  
熙すら繩張り察知し戻りゆく森の掟を届けたき國  
Gセブン女性活躍大臣会合に日本国のみ男性大臣  
長岡の花火燃せたりゆくりなく亡友浮かびけり声聞きたきよ  
この人の遺伝子我もちたるを咀嚼止めざる口を見守る  
頼朝の心境となり野菜畠のはきだめ菊をすべて抜きとる

船田清子

やさしき花々

・天

今朝生れし蟬の鳴き声遠慮がち七月十日！あれ？君や呼ぶ？  
頭上へと泰山木の注ぎるし芳ばしき香の失せて幾年

桐の花紫に空へ祈る様幹も残らずいつしか消えて  
わが愛づる優しき花々すでに失せ暑き路上に満つる魔ガス

水芭蕉石楠花色に染まりつつ風の歌など聞くるならむ  
この秋はすでに枯れたる南天の植ゑ換へなさむよき苗あらな

昭和なる二十四年にこの土地に居を得て父母の植ゑし南天

藤森巳行 朝井さん・中島さん

・銀

地中海本社で校正した日日を思ひ出すなり仲間一人逝く  
朝井さん中島さんの訃報届く共に本社で校正の日のあり  
今はただりし日偲びお二人に題目送る追善回向の  
地中海の友との出会いが我が人生豊かに育み充実させて  
若き日に君と寄り添ひ歩いたね音無川は今日も流れる  
我が心に残るメロディー川は流れる君と歩いた音無川よ  
埼玉は熱帯地方かこの夏は熊谷鳩山三十八度越ゆ

本元由美子

むかし、むかしの夏

・岡

「加美乃素」を髪うすき先生に贈りたり悪戯盛りの十八歳の夏  
京阪の鉄路沿ひなる疏水の面勾ひたちたり二十歳の夏に  
これきりの別れと決めて京阪の電車の窓に書きしニニシャル  
夕食後まつて鳴りし黒電話母の目配せ父の戸惑ひ  
麗人の赤き蛇の目に隠れての逢引き覗たる吾の境界線  
納涼の風にふかれての別れぎは握手する手の絆まり忘れじ  
幼き日朝露を探りて筆を持ち母の病氣の平穏を書きぬ

## 檜垣美保子　一対

・昴

細き脚に併つは小鷺の一羽なり出で会う人の少なき疏水辺

五時半に家いでてゆく朝散歩ひとり決めたり必ず守らん

頭上よりジャンジャンジャンと蟬の声今日もあかるく陽の昇りくる

黒き鯉一匹住みいる疏水なり流れに反し湖りゆく

独り居の日々にしあれば鯉に会い驚に出遇うが唯一楽しみ

わが歩みいつしかおそくなりており疏水の流れに追いこされている

早朝は毘沙門堂へ日の暮れは安祥寺へが私の日課

## ぱぱりようこ

ためらう

鹿

## 牧雄彦

赤穂御崎II

・大

私の留守のあいだは部屋の物すべてよみがえる。そんな気配の

ボスターのカラヤンは流麗にタクトを振りステオは力強くベートーヴェン

日記帳はひたすら過去をさかのぼり、回顧・久闇・はたまた溜息

あれあれ装身具たちはお互いに自慢のしあいっこをやりだした

ドレスらも踊りだしきて描きかけの裸婦にデモンストレーション

書斎では思想家たちがひけらかす知識を説くまいとノートとエンビツ

私はそれを感じているものだからときにして困ることをためらってしまうのだ

## 浜谷久子

はらから

地

## 松浦禎子

薪能

・羊

戦争に両親亡くしひとりとなる従姉妹を姉と育つて七十年

三人の娘に囲まれ歳を重ねる従姉妹の嬉しいときの涙腺

姉と呼ぶ人はわが親亡き後も思いのこもる供養欠かさず

明るくも涙もろもあるひとは別れの厳しさ誰よりも知る

夫亡くす哀しみ続く一年を母を祖母と支える二十二人

喪った家族は還ってきたらうか子孫曾孫の面影のなかに

はらからの歎だけあろう心配も電話の声はいつも優しい

ところとまどろむ夏の家に棲むいさき蜘蛛の去りゆく音なく  
はにかみてまばたきをする少年が青きフレームの眼鏡を貰いぬ  
日曜の火起こし体験 少年は火を吹き夏を挑発している  
決着をあいまいにして閉する窓カラスの群が溜声に鳴く  
たまきはる命なりけり一対のように晩年暮らしたる父母  
「添い遂げる」は死語にあらねど直角に曲がろうとする一人と一人  
むざむざと手放してよきか縄菓子のいっぽんの棒に蟻がむらがる

向かつ島の緑と削られし山肌が朝のひかりに影を濃くする  
ゆく人のまばらな道は歴史ある商家が並びて今もあきなふ  
塩田の跡を巡りてとほき日の塩とる人の汗を思へり  
生島とふ小さき島に古墳ありこの地で逝きし秦氏の墓らし  
大陸ゆ秦氏が伝へし養蚕や機織りの技この地に根付く  
はるかなる國より来りて一族はいかなるたつきを嘗みにける

五月の日はやかたぶきて家島は静かに影を沈めゆくなり

## 松浦禎子

薪能

・羊

雨すぎて迎えし今年の薪能自らの歩に平間寺まで  
夕ぐれを待つ間に参ず大師像青葉の匂うその足元に

千二百五十年前の生誕を中心浮かべ立像仰ぐ

讃岐びと故里としてわが師ありそのよろこびも今日のえにしに

台風を逃れて今宵の薪能大道師貫首据払いたり

花見稚児十人が坐す能舞台「鞍馬天狗」の稽古を積んで  
平安の乙女の恋を舞いあげて背のみ残せり観世清和

## 松本多摩子

半世紀

・桜

宮本靖彦 炎天

・凌

半世紀住みし地域に共に老い面倒見るも見られるも老  
介護車を近隣に見る日の多く越して五十年人も老いたり  
慎重な娘がコロナにかかりしと離れておれば神に祈るのみ  
俊敏に動くメダカに励まされ朝はおはよう一日始まる  
今朝抜きし草にも名前ありしとう朝ドラ見れば抜く手の止まる  
大谷の一発ありて暗き世に誰もが笑顔ニュース再び  
われの腹ポンとたたいて孫破顔もあるい顔でかわいさくらは

## 三 浦 好 博

沸騰化

・銚

たくさん事語めしと友は言ふ小物の我にはそれは少なき  
八十路過ぎの己の事のみ一杯にひとの哀しみに感覚鈍し  
我が歳のあたりが一番多いなと死亡欄見ても未だ他人事  
無事脱皮せしかと殻を掃除機に吸ふ家蜘蛛の子の育児パパ  
瑠璃色の蜥蜴とテラスにまた出逢ふ我家の縁の下が住処よ  
幸相が「経団連に謝罪」かよマイナカードはトラブルカード  
暖暖化の時代は過ぎて沸騰化焼かれ煮られて我らは何処

## 三 木 ま り 杜

・昂

御代田澄江

うつせみ

・茨

とりどりのシャツ風に揺れる物干しにシジユウカラ来てせわしく動く  
くるくると日傘をまわし少女行き小径にざあっと風吹き下ろす  
雷の雲は遠く北にあり庭師に切られる樹々匂い立つ  
真昼間の濃い影落とし樹にのぼる庭師の脚絆に蝶とまり鳴く  
かくれんばの子らを隠して暮れなむ鎮守の杜に梟が棲む  
夜のとなり降りてなおさら響くる鎮守の杜のいきものの音  
雑草と呼ばれる草は夕暮れに青い花咲き雨に輝く

老犬を抱き鼻合わせ歩む人吾の抱きしクロ星空にあり  
思はざりし刀根山坂の厳しさを卒寿迎へし散歩に実感  
棕梠の葉は今年もカーテンつくり了へ炎暑の陽除けの準備ととのふ  
強梅雨も終りまちかか妻と会話今夜は如何、降るや降らずや  
炎天に隠りて京の歌写す涼風立つ日の「歩こう会」期し  
山田洋次と三十九度五分この暑さ豊中語るよすがの増えぬ  
一〇〇回を超えし我等の「歩こう会」バラ園を背に「豊寿」を飾る

## 三 好 聖 三

ほつほつ

・伊

キヤップから妻羹帽子に替えて行くゆくほかはなき烟炎天  
濡れタオル首に巻きしも早々と乾きて熱き風に靡ける  
淡緑の葉群を下にほつほつと千日紅の灯のともり初めたり  
やや濡れし猫の背中を拭いていて俄に雨は強くなりたり  
憂鬱の思いはあるかな無為徒食うめぼし入りのおむすび今日は  
「性欲の弱となりてありたきを」と、いとおもしろき女人この歌  
卯の花の溢れるところ石垣にのぼりて猫は眠りに入りし

夏至過ぎの小寒き雨に戸惑ひぬ縁者に二件不幸統きて  
雨小止み外の面に出でぬ八手葉に露しとどなり空も小暗し  
「吉祥寺」ひびき懐かし夫と通ひしハモニカ横町の鉄道模型屋  
〈小さな旅〉に紹介されぬ老夫婦営む模型屋二人睦まじ  
時々に足延ばしたる深大寺蕎麦の味こそ今懷かしむ  
静けき中読書に写経なしをれば時の逸ぎゆく吾が悦楽の  
マイナカードの不調はいつか収まるや二万円にも付かず吾や見守る

茂木斌 間々田八幡

・埼

山下雅子 花あかり

・習

半年の穢れ祓ふと詣りたり間々田八幡夏越しの祓へ

茅の輪潜り今年は何処の社にしよネットに近場の八幡探す

若き頃スープーカブに日光まで走りし道なり四号線は

野木、間々田利根川越えて八幡の社まで46キロの走り

創建は千三百年までの古社にして間々田八幡雨も止みたり

境内に四本柱の土俵あり力石あり池の辺に芭蕉の句碑も思ひがけなし

ああーあつ、空也上人の持つ杖がわれも欲しいよかつこよすぎる

もとむらしげと

八重洲ブックセンター・そ

上京のつど訪れし八重洲なる書店に求めし無名の詩集

永遠の価値を売り来し八重洲なる書店は四十四年にて閉ず

出張の帰りに寄りし古書の街ワゴンの中の本との出逢い

芥川賞受賞の広告新聞に華々しけれども書店では買わず

本好きの我さえ買わぬ町角の書店のドアが閉店を知らず

ひまわりの園をおもいて読み始む送料無料で届くトルストイ

小六のわれが寄りたる貸本屋ポケットの五円で一冊借りる

桃原佳子 菜園

・沖

轄作の叶わぬ三坪の庭畑に西瓜の苗三本植える

雨止みしさ庭の土を掘りおこし黄花コスモスの種を蒔きゆく

隣接する田んぼは売られヒメジョーンの繁茂せるを我が家より見る

理らの昨夜荒らしたる我が庭のフロックスの花五本倒るる

幾度も修正したる文章を暗き居間にて消し終える

まな板の刻み青紫蘇の匂い立ち老い二人の昼餉も楽し

熊鶏のしゅわっしゃわっといく百の声に疲れる猛暑の日々

山野幸司 苗

・沖

田の中をこけつまろび差し苗を落とさぬようには踏まぬよう

草を取りまた草取りの夏の日々一杯の白湯喉下り行く

除草機とひとつとなりし水田を時折りおおう青き雲あり

ひと處の水大豆に時忘れ南中の部屋こもるは家守

炎天にトラクター乗る先に山脈黒く手に汗握る

夏光切り試験コースの道走るトラクター引く車は揺らぐ

地平線立つ鉄屑の山空に高々つかむクレーン光る

山本孟 夏の道

・大

木洩れ日道仰けば雲なき夏の空あぢさる花終へ葉を垂らしめる

鳩・雀頭あさる草道木洩れ日に前行く人の背模様動く

緑地帯さわざわミンミン木陰道陽の照る向かう夾竹桃咲く

古民家の追憶の中にゐることく木陰の落ちる森の氣を吸ふ

舗装路の真夏の熱波立ち止まり少しの陰に片寄り水飲む

炎天の焼けつく舗道のベビーカー母は日傘を懸命に傾け

日傘差し一人分のみ陰に入り白き腕が傘回しゐる

養学登志子 ノノメは

・凌

キューバ生れのコンガを叩くひとがいたアイデア豊かなもの身にまとい  
一行のエールの葉書ときにして紙面に踊るコンガのリズム  
つれあいを「月さん」と呼びしなやかなひと逝かしめてつき草の咲く  
ユニフォームはブルーのチーム前田健太スパイクの紐赤にして立つ  
勉強していくつまですればよいのかと尋ね孫に「死ぬまでじゃ」と祖父  
左見右見西夏の文字の拓本のわかりそうでも解らぬ漢字  
すつきりと画数多き西夏文字メメノは「」ノノメは人偏

横田敏子 母の里

・福

盆来れば眼裏に頭つ母の里汽車にひと駅待ちこがれしを  
「よく来たなあ」ぼってり太めの伯母さんのいつもの言葉うれしかりけり  
染太く天井高き母の家座敷抜けくる風涼しかり  
鶴居には数多の遺影並びおり われに繋がるご先祖様たち  
二つ違うの兄は曾祖父に似ていると言われてたこと思い出したり  
盆踊り告げる太鼓や笛の音の聴こえて急ぎし寺の境内  
伯父伯母も従兄弟も疾うに亡くなりて速くなりたる母のふる里

吉永惟昭 妻の被爆日

・熊

入院は部屋が別々今年だけは会えぬであろう妻の被爆日

ご飯だけでもしつかり食っているだろうか心そわそわ妻の被爆日  
被爆刻は警戒警報だったとう妻の言の葉今も信じる

被爆地は二キロメートル幽明の境の谷に飛ばされし妻

九十まで生きるとなぞは思わざる同じ思いの妻の被爆日  
七十八年よくぞ耐えしと言つてやる妻の被爆日心の底から

風化とはかくも早かり老化をも連れてゆくなり妻の被爆日

磯田ひさ子 木いち

・森

草叢の間を動かしキチキチと鳴きつつ飛び立つ精靈バックタ  
覚悟とはいかほどのこと音をあぐるわけにはいかぬ在宅介護  
非常事態 家族総動員 死にゆける夫を看取れる半年ばかり  
人はみな凌いだ別れと自らに言ひきかせつ朝を迎ふ  
祥端の香炉に朝々香を薰く古道具屋に亡き大買ひにし  
ほんたうにひとりとなりぬ盆棚を片づけ広くなりたる家に  
木いちこの葉のやはやはどうすみどり朝のじじまにひらひらと揺る

市原やすひ 梅干し

・萬

梅雨明けのからりと青い空の下笊にあげたる梅を広げる

梅の上幾度影を落とし行く揚羽蝶は庭に遊べり

梅干しの酸ゆき匂い部屋内に満ちて私も満ち足りている

干し上げて梅を瓶に收めつつ久し振りなる仕事をしたと

葉陰よりほろりと落ちる掌ブラックベリーの美味しい茎

一点差の試合ばかりの決勝戦天と地分ける球児切なし

家を出ぬ事が老いには生き延びる手立てか今日も猛暑は続く

梅本武義 日本かな

・羊

猪に出来合う早朝二歩下がり道を譲れば山へと帰る  
猪も喰うに必死と妻が言い貧しき頃を思い出させる

害獸を撃ち食料にする演習畑が被害に遭うたび思う  
いざとなれば日本にはあり耕して天に至りし潜在農地

国家転覆罪なき日本かな沖縄を琉球と言いて歓迎される

中國史から消されるか白紙テモ火葬場に死者あふれしことも  
腹心の扱いまでもブーチンに学んで居るか習近平は

大浪美雪 小湊線

森

神田鈴子 比翼湖

・

・大

東京より一時間余の房総に風機のまはる電車の走る  
難読の駅名多き小湊線 海士有木はた馬立・飯給  
駅舎脇に連断機の竿を作る人 青竹、ビニール、菜籠の熱湯  
炎帝の焼き尽くす季やせ川の緋鯉はゆらり餌をかへせり  
白鷺も鳥も絶出の稻刈りぞコンバイン追ひ群なしつきゆく  
玉章といふ號なる名をもつ鳥瓜打ち出の小槌を核とし育む  
うこん色の光鎧めて蘇鉄の花紡錘形の太ぶとと立つ

奥田陽子 野草

・羊

ゆるやかに川の岸ゆく乳母車髪長き人の背を見送りぬ  
熱暑なるこの朝さえ地に降りてついばみでおり低く飛びゆく  
ひと日咲くそれのみに命育みし蘚草の夏の野の日日  
ガラス器に水を満たせりひと日のみ咲く野の花の黄苔を活けん  
明朗をひと生の宝と生れきたる女童われの胸に凭れて  
蓄なる桔梗むらさき風船に似るるとちいさき掌に乗せており  
捕虫網ふたつを置きて帰りたり歓声はいまだ部屋に散りいる

小野雅子 扇子

・羊

逢うて泣き別れに泣きて九十歳の思いのかぎりを叔母は隠さず  
謙かけをされいるようなライトブルー厳美の渓になに便べとや  
語らうは過ぎし日ばかり未来絵はもはやどなたも描けぬ齡  
樂しげに語らうものよ弟ふたり桐の紫におうかたわら  
真夜中に雨が降ったと弟の言うにおどろく深く眠りぬ  
今生の別れのように咲き滞れなにやら哀し石楠花の紅  
一闇に昔も今も餅文化朱塗りの椀に生姜がかおる

菊地栄子 軒下の鮭

・海

「髪白くなりましたね」とに向かひて言ふ人ありき「地中海」の良さ  
染めませんかと言はることもなくなりて四十年通ふ美容院なり  
藤色に染めてはいかがとかつて若き男性美容師に言はれしことも  
老いし母の姿は知らず鏡見て伯母に似てゐると思ひし日あり  
似てるが遠ふ人々と旧友を見し日も過ぎぬ互ひに老いて  
白髪染めの広告も見ずボリシーでもなんでもなくただありのまま  
名古屋場所の観客はみな扇子にて風を呼びつつ取組みを見る

残雪の白き月山久し振りの白きスーカー呼び合うことし  
パークリングエリアに枝をそよがせて櫻若葉は何を見ている  
ひもすがら荒ぶる波の日本海ま近き國も阻むがことし  
城下町の歴史偲ばせ手入れよき赤松の幹藤の花房  
大きくて梅干しにはむかない語る古木はまだ小さき実  
青銅を帯びし藩主の墓の列静寂に入り写さんとする  
鮭に塩擦り込み塩を洗い抜き乾し上げるとう軒下の鮭

久しぶりの友の誇ひに出かけたりホテルの前に琵琶湖ひろがる  
一切の雑事を忘れ久びさの友との語らひ夜の更くるまで  
三十階より見下ろす琵琶湖にきらきらとさざなみは揺る朝の光に  
さざなみの光る琵琶湖に浮かぶ舟人影見えず動くともなし  
永らくを会えざるままに逝きし九十八歳のいのち尊し  
悲しみは続いて来たりわれよりも若き人の訃を息呑みて聞く  
病み臥して歌も途絶えし頓名さん十日前の電話が最期となれり

上林節江 一関温泉郷

・湾

# 北山雪男 移住の街に

・伊

# 河野繁子 種を蒔く

・雁

居り得ぬ糞鄉の記憶 震災後「うさぎ追ひし」の唄聞けばなほ  
半径はおよそ三杆、をさなくてひとの世の騒知らず ふるさと  
寅さんに帰る家ありカバン提げ「あばよ」と去りし虹の彼方に  
その夜更け大阪地獄に降る雨は無能嘲り降り止まさりき  
飛び石を伝ひて歩む日々である移住の街に過去を送りつつ  
デラシネに縁なき土俗たとふれば前登志夫なる山人の間  
北の空仰けば青き山々の連なる涯に待つ雲のあり

## 草刈十郎

葱坊主

・世

葱坊主生意氣さうなものばかりプランターの中位置占めて立つ  
コロナ禍の自粛の解けて惜春の雨の集ひととなりにけるかな  
嬉しさを体ぶるはせ燕の子口いっぱいの餌を待つなり  
停戦をブーチンへ伝へよ白鳥よ命をうばふ戦やめよと  
やはらかな春風吹きて花の雨庭の雑草ひたすら背伸び  
したたかに知らぬふりして呑み込んだ嘘が心に突き刺さるなり  
かくまでに澄みし顔のこの子らに青葉の風は光りてゆけり

## 國井節子

感謝

・春

バラ色の花の吐息のあざやかさエジプト生まれネリネの花まり  
生終へしものの軽さよ風吹けば北の山から枯葉の行進  
平凡で無事なる事を感謝して今宵安らかに眠りに付きぬ  
土曜日は愛する息子とショッピングわれの冷蔵庫満たして帰る  
夕立の雨のひと降り千からびし大地を叩き熱き息吐く  
夕闇に白きレースの花を編むからす瓜の花月と向きあふ  
ひつじ草ゆめ見る」とく水に浮くものうき時よひつじの刻は

## 小林能子

だんまり1950年夏・羊

帰還せし叔父は己を語るなく消息不明の戦友を言ふ

縁近く正座の叔父に宿題を閉ぢつ広げつ挨拶もせず

二等兵が中支で兵長になるまでの家族も知らぬ叔父の歳月  
家ちゅうが声挙げて西瓜とトコブシに塩も添へ叔父の生還祝ふ  
予科練帰りと復員の叔父のだんまりに高鳴るラジオの高校野球  
国敗れ予科練崩れと謂はれてもうちの貴一ちゃんが死なず良かつた  
ハウス地区に目もくれぬ叔母が復興を信じて馬券売り場に立ちぬ  
まろまると転がり光る柄の実を拾つておりぬ手さげが揺れる  
苦いが効くイワシの焦げが腹に良い祖母の療法柄餅食べろと  
ブラックの苦味がわかれれば一人前苦い柄餅無理につなげる  
年越しを現場で迎えた出稼ぎはうるち突き抜き餅に搗いたと  
苦みは毒反射で吐きだす幼頃柄餅うまいは思い出だけか  
白はボール杵は麺棒マンションの柄餅つきの実験道具  
キッチンで杵の代用板もち搗き一本でせっせ千本餅つき

近藤芳仙 農耕讃歌(一)

・信

手をぬくも育つ馬鈴薯・葱・南瓜とほき煙へ工夫をこらす

水滴たすべットボトルをかかへては苗の根付きの様子見にゆく

ひとときを烟にいづれば心足らひ深き眠りの吾にくるかな

風船の空気がぬけてゆくやうに一時にくる農のつかれよ

駆退きし日よりはじめ家庭菜園亡母にならひし歎もち出して

米俵大八車に引きたると亡母の戻後の姿しのばゆ

いい仕事してぢやないと独り言つ亡母の手縫ひをほぐしゆきつ

坂出裕子 上直美

ギフトッド

・天

ああそうだそうだつたんだわたくしはギフトッドチャイルド生き辛かった

「変わった子」わたしに貼られたレッテルをばがさすにいた母の偉大さ

むずかしく理解できずにいた言葉「普通」「平凡」「人並みでいよ」

「あなたとはつきあえないわ賢いね賢すぎるわ話が合わない」

もつともつともつと賢くなりたいわ誰ともうまくつきあえるよう

それなりに人に合わせることも知りともかく何とか生きてきました

人はみなギフトッドチャイルド誰もみんなその人だけの輝きを持つ

坂出裕子

桔梗

・洛

むらさきの桔梗ひと群窓の辺に咲きしを今日のあはせとして  
コロナ禍に閉ぢ込められてる秋の桔梗ひとしほ美しきむらさき  
腐葉土を入れて育てしミニトマト甘いねと子が喜びくれて  
誕生日お祝ひ有難たうといふ声変り期の孫の電話の

子の孫の写真机上に並べ置き会へぬコロナの日々を過ごせる  
いつ果つとも知れぬこのコロナ禍の日常となりゆけるさみしさ

川もまた生きて息せり雨後の朝 水かさ増して高く波立つ

佐藤道子 烏の子

・甲

大型犬二匹と散歩の人に会ふウクライナ逃れしエリートなるや

肌寒き朝の散歩に会ひし女素足に半パンいつくより来し

足細き見馴れぬ色の大連れて北欧の人か初めて出合ふ

電線に上手に止まれぬ鳥の子二三度ゆれて直ぐ飛び立ちぬ

美しい羽の子鳥三羽ゐて線路の脇の道を歩める

子鳥三羽それ道に遊びをり親鳥はもう見守らぬらし

アガパンサス紫陽花ベコニア芥子の花リハビリの道のなぐさめとなる

篠原まり子

懷古

・羊

吉野ヶ里石棺墓聞く弥生の代有力者の謎果てしなく  
いつしかに逢えなくなりし人思う健在願いつ『塩をもすこし』

ロシアにて「百万本のバラ」歌いし日あり加藤登紀子は満州生まれ

蒙古風吹く満州・新京文字が溢れた七首に出会う

引き揚げの荷に詰め込まれ山猫の小さきシユーバー巻ることはなく

緊急のアラート部屋に鳴り響く線状降水帯今ここに

窓に見る暗く昏くて息詰まる視界はあらず豪雨の真中

柴田登志恵 春蟬

・天

すきとほる椿の林に春蟬の声ひろがりぬしゆわしゆわしゆ

春蟬は二センチほどの抜け殻を胸の高さの幹に残しぬ

人気なき春蟬の鳴く椿林すでに異界を歩みるるらし

春蟬に導かれゆく椿林争ひの国の麦畑につづく

梅雨時の大気の重さ振り払ひ椿の林に木漏れ日搖る

山裾にうすくれなるの山百合のうつむき咲くが結界なりぬ  
山を下り広野に出づるや明らけく郭公は鳴きまだ日の高し

## 須川千恵香

墓石

・眉

## 関根和美 蜂の巣騒動

蜂の巣騒動

・埼

故郷の墓石移転の話題あり先祖参りのみ足運びある  
 弟が寄せ墓造りまた移転案練りつつ彼岸へ発ちぬ  
 坂東家のルーツは古く諸説あり先駆者の勞痛く身に沁む  
 水源に沿ふ畑の畦茗荷 路芹 三つ葉 自然の副菜  
 隠れ屋は倉の二階の小窓際ダンボール一つ秘蔵の宝  
 人生の四分の一なる幼少期故郷温し地蔵の森よ  
 変らぬは継ぎ来し広き山 田畑み魂なきさと幕を下ろさむ

## 鈴木結志 生きの一念

・福

古筆切に書のわざ得べくふでをとる生きの一念われのみのもの  
 錯覚か「杯中の蛇影」はらうべくみじかうた詠みめいそうはらう  
 ゆめの旅いつも物理の中にいる秀樹にならいみじかうたよむ  
 ねんりんをふでに積みきて似非聖まがいの書家に甘んじ生きる  
 スマホ世の化石びとともにふでとりて平安かな流れ美にのる  
 いく万字書き来しふでやわれよりも一足はやく丸みおびきぬ  
 書にうたにどちらか選べなどいうな生きゆく力の礎をささう

## 関根榮子

イヤリング

・埼

この頃は事を為すときふと思う氣力・体力どちらが先か  
 僥劫に思うことなど増えくれば一つ二つと先延ばしする

マスクにてイヤリング付けざる年月を思いつ手に取りて眺むる  
 死き友の家清やかに静もりて門辺に待てば出で来るごとし  
 この家の紫陽花は赤隣り家は真青の群れと道曲り来る

ゆっさりと白き紫陽花揺れあれりここにとどまる時の至福か  
 温暖化否地球沸騰と国連事務総長の言えり

旧き家の障子はりかえ残多く気合入れねば手を出せぬまま  
 勾配のきつき江戸期の二階より破れ障子を夫抱えきぬ  
 いざ障子洗わんと外の流し場に寄れば見慣れぬ大蜂のとぶ  
 わが頭上ひくき軒端に何とまあ異様な蜂の巣思わず退る  
 日々ここに野菜の泥を落とす夫よくも気づかずよくも刺されず  
 たまさかに見れば見つかるものありと怠け者にも役割のあり  
 スズメバチ駆除する人の大仰な防御に事後の処置におどろく

## 高尾恭子 ランドセル鳴る

・大

ドアノブを回せば曼荼羅めくるめく月に一度の子ども食堂  
 ツナ缶の賞味期限をたしかめてゴンは黄金の尻尾を隠す  
 甘口のカレーライスはNGとショートカットの少女がわらう  
 兄ちゃんの後を追いかけ追いつけぬランドセル鳴るふるさとに鳴る  
 黒板の歎立表に明日があるあさってがあるメダカの学校  
 メルルーサは海の何処や転校生みたいに薄い白身ステイク  
 教室は「世の中」だった生温い脱脂粉乳のみどに落とす

## 高津砂千子

兄逝く

・風

子どもらの登校見守り終えし兄町内会から温泉に行き  
 たのしみの温泉なりしが突然に兄身まかりぬ八十四歳  
 二日前兄妹会の日を決めしばかりぞ兄の声よみがえる  
 はらかららのまとめ役なる兄逝きて兄妹会の統くは難し  
 損得なく人のためにと働きし兄は迷わず前を見ていき  
 一度とて寝込むことなき兄喜一膳者のさなか逝きたまい  
 ましろなる兄のみ骨の大さよ葬式の内助の証なるべし

滝田 靖子 シェルター

・新

カーブスに通ふと告げれば運動はただでも出来ると言はれてしまふ  
いささかの軽蔑が練り込まれてる言葉が過敏な心に刺さる  
会ひたくない話したくない一日のわたしのシェルター市立図書館  
こんなもの誰が読むのかと思ひぬし郡山市史買つてしまひぬ  
うつむいて本ばかり読んでゐるわたしの身体には不健康な日常  
言ひ過ぎを咎める声の内にあり薬降る道を黙して帰る  
熱中症警戒アラート発令とふ言葉の耳に馴染んで猛暑

竹下妙子

嵐立

・霧

嵐立つ午前三時のかさブランカ無惨に散りて魂鎮めせむ  
名物の打上げ花火鳴りわたり秋晴れの宵窓より見上ぐ  
秋風とたしかに思ふ夜の風テーブルのわが書ひるがへしゆく  
ときの間をしごる足をかばひつつ秋の陽落ちし部屋に佇む  
一齊にわが前とべる鳩群の白き輝きとなりて去りゆく  
バレエに心燃やしし日も遙かバレエ教本今も持ちゐる  
読みぬまま寝てしまふこと多けれど積みておくバレエ演劇書

田土成彦

羽化

・宙

あめつちの遅りたしかに初蝉の声聞きとむる七月十日  
ながい永い地中を追憶するやうに梢に残すその抜け殻を  
胴体も羽も透けつつ羽化遂げてゆくこのときよ命あやふく  
液体を縮れた羽に送りゆく一途はわれのもたざりしもの  
地中では啼かない蟬も天空のまほらに大きな音を聞かしむ  
土の中はむしろ楽園だつたかと蟬は梢に啼き叫びる  
意味ありやなしや落ち蟬のみな腹を向けて終命の時を迎へる

田土才恵 彰代さん

・宙

福岡へ移り住まいし彰代さんもう少し待ってと言ひし現に  
福岡の風に遊びし日も有らん大和まほろば心に抱きつ  
てきぱきと仕事こなして気に止めず働きっぱなしのひとよを生きて  
夏の朝明るむ早しカーテンを透かしてひかりはキリキリ迫る  
早起きの人のメールに朝一番身支度水遣り今日が始まる  
黄の花に祝われてわが七月のランチタイムは三十七階  
夏の陽をしかと受け止めカッと笑う姫向日葵の文月尽日

玉井綾子

時間

・羊

吾の前で自動改札に引っかかる人に返せとつぶやく時間  
スマートに改札通る若者をよけ定期入れを鞄にしまう  
十五分以上早くは許されず出勤時間のタイムレコード  
休みの日たまりし家事に夕暮れて五十代には夏至は短し  
沖縄の夕陽に今日を許されて暗くなるまでタコノキ数う  
積ん読本 旅に連れ出し読みぬまま帰りいつもの明日が始まる  
遅れがちな自覚まし時計十五分進めて明日を先取りさせる

中島央子

半夏生

・森

百年の時空を越ゆる大槻川越へつづく街道を駆る  
樹の声と風の声とが混じり合ふ櫻並木の川越街道  
ときめきの淡くなりきて庭隅の紫式部の実がゆれてゐる  
残年のみゆる明るさ寂しさよ遠花火消え夜の闇ふかし  
半夏生めぐり巡れる五十年夫の忌姑の忌百合にほふ  
戦中派と呼ばれつ存へぬゴンドラに乗りそこねしを唯一悔とし  
人去りしアウンユビツの現実なる錆びつきし線路夏草のなか

永田進一 午睡

・山

中村博子 ことばを紡ぐ

・池

初花の夕顔咲けば風涼し宵闇迫り蝉の声聞く

宵闇の迫る夕暮れ水打てば風に涼しさ増す嬉しさよ

自治会の防犯カメラのアンケート必要認めつ費用に課題

それぞれの事情はあれど近所の死去を明かさる数か月後

今年また異常気象の続くなか高温アラート続く日々にて

早朝の水撒きおれば太陽の輝き昇る山の端すがし

チャーチルは大戦中も午睡せりわれもいささか見習うべきか

永塚節子

まいまい

・銀

昼日中建物のかけ樹のかけに小休止しつつ家までの道

年ことの気温上昇猛暑と言ひ酷暑と統くその次は何

身近なる絶滅危惧種のまいまいを今年見たのはただ一度のみ

まいまいに続く絶滅危惧するは五十年先の人類ならん

飛びゆける命の証からからと軽き音する蝶の抜け殻

残されし命の長さに思い寄せうつせみそゝとてのひらに受く

・沖

仲西正子

水無月

・沖

こぬか雨よろこび潤む紫陽花の花に逢わんと今朝の早足

公園のなだり彩る紫陽花の笑みてこぼせる七色しづく

『搜してます』喜屋武の呻に父の骨を田村庄志はただひたすらに

七十八年戦後は統けり父のこと思い出かたれぬわが夫もまた

その母と戦さに死にし胎児らは祀られるなく戦没者として

慰靈碑に刻名されぬ人らにも寄り添いてあれオオゴマダラよ

ハウスにて生まれしばかりの蝶なれど探りつつゆけ天空のみち

熱心に短歌のサークル創らんと一人の女性の訪ねきし日や

『短歌』をば「ことばを紡ぐ」は言い得たり地域に歌の文化芽生えて

コロナ禍に勉強会ありウイズ・コロナ乗り越えいとも熱心な会

桃山に生れて二年余根付きて二十一回「ことばを紡ぐ会」

さまざま世界のニュース話題多く友らに学ぶわが幸いよ

月一度桃山会館へ集いつ短歌と関わる和やかな時

知らぬこと多き吾にてアドバイスの覚束なきを助けられつ

西堤啓子 热中症アラート

・天

晴れマークは脅威のし今日もまた熱中症アラートくらくら燃えて

あこがれのアルハンブラの夕景を浮かべ静かに赤とんぼ飛ぶ

コロナ五類にマスクはずせば街さえも面がわりしたタワーマンション

ジャスマインの棚の向こうは果樹園 小鳥の営みせわしく碧い

A—Iと将棋

A—Iと短歌 同心円の波が寄せくる

傷ついたプラックボックスが認定す「君はこわれている」

戸外眩し 押し黙る人ソファに座し吾は「非色」を延々と読む

久我田鶴子

中島彰代さん

・羊

夏の日の計報がとほく引き寄する南蛇井駅のおきなぐさの花

銀座にて歌会のあとをわいわいと決まりし歌集名「塩をもすこし」

商社マンの妻とし行けるヨハネスブルクにメイドを使ふ才覚のあり

辻さんの家にあふれしこゑごゑの歌集出版祝ひて一日

奈良の家に呼びたかつたと言はれたり手放す寂しさにぼせるごとく

糸島の野菜の箱に手づくりの梅ジャムひそめ送りくれたり

## 沙

久我田鶴子

印度洋を越えて冬の太陽が沙陰るはてに沈みゆくみつ  
『離離航海』

「印度洋」は、むろん「インド洋」。漢字三文字の「印度洋」はあまり見かけない。「沙」に「すな」とルビ。「沙陰る」では「すなぐもる」。「陰」という漢字は、動詞の意味としては「おおう」「おわれる」「かくれる」「かげる」「くもる」があるが、読みとして熟しているのは「かげる」であって、「くもる」と読ませるのはやや特殊と思われる。

「沙」は、「砂」の本字。意味は、①みぎわ。水への砂地。  
②すなはら。さばく。③すな。(④)こく微細なものに冠することば。  
⑤よな(げる)。よなく。水中であらい分けて、悪い物を取り去る。〔「新字源」による〕それに対して、「砂」は、「沙」の俗字。訓読みに「すな」。意味は、すな。いさ(まさ)い。  
インド洋を越えて来て、砂で陰っている果てに冬の太陽が沈んでゆくのを見た、というのである。「沙」という字から、その背後にある沙漠、沙漠の国が想像される。アラビア半島、アフリカ大陸。はるばると航海して、ここまでやつて来たのだ。

沙の涯にいま動ずめる落日のおおきなる響も耳にきこゆる

この歌では、「沙」を「さ」と音読みしている(ちなみに、「沙」には「すな」という訓読みはない)。「動ずめる」は「くろずめる」と読むが、「動」には「あおぐろい」の意味がある。黒とは言つても、青みがかつた黒と見てよい。砂漠の果ての落日が実際にそういう色合いで見えるのかどうかは分からぬが、少なくとも作者は青みがかつた黒い落日と感じているのだろう。

一首は、「落日のおおきなる響も」と、視覚から聽覚へ。これも実際に落日の音を聞いたというのではなく、落日の大きな響きが聞こえるように感じたことなのだろう。砂漠の落日のスケールの大きさを、轟くような音として表現したものかと思われる。

リビア風しすまりし後くぐもるそら冬月の暁の砂を飛ばす

リビアの砂風が静まつた後に冬の月。静まつたとは言え、細かな砂粒はまだ飛んでいて、空はくぐもつておらず、月の暁に飛んでいる砂粒が見える。冬月の暁が砂を飛ばしているという表現が、単なる情景描写ではなく、動的な生き生きとしたものになつてゐる。ここでは「沙」ではなく、「砂」。さらに、「いさ」(ルビ)。細かな砂粒を見つめているのである。

他にも、「沙」にはこのような歌がある。

かせとおく飛はしきたれる砂の粒掌にかかよえはつくづく

砂疾風ふき過ぎて余響ののこる空はや黄に澄まん渦なすひ  
かり

奈良

宮前 英明

辻彌生先生

みささぎは山背葛城見渡せる若草山に陣取つており

外側の周濠はなくその上を国道走る宇和奈辺古墳

今日もまた平城宮址にさしかかり近鉄電車の車窓より見ゆ  
一介の植木職人の努力にて今も見られる平城宮跡

蛇行剣いつたい誰の持ち物か興味尽きない古代の歴史

富雄の地今は住宅立ちならぶかつては大和の中心の地

滝坂の道を何度も行き来してやっと出会えるヤマドリかな

ヤマドリは万葉のころ文字になり希に会うのはその子孫なり

明日香には石造物があまたあり石人石馬に關係ありや

五条野の植山古墳の石棺は祖父とおんなんじ阿蘇ピンク石

高円の尾上の宮はここにありこころやすめる休息の地

高円の野辺にうずまる道標右かすがちか道大ぶつへ

奈良盆地大阪平野を見渡せる生駒山地を何度も歩く

私は短歌を作ることを一時中断していた  
が顔を合わせると辻先生は言葉を残せという。  
それが何を残すかは分からなかつたし、最  
初あまり氣にも留めていなかつた。

最近祖父や曾祖父が残した文書を読む機  
会があつた。お陰で御先祖の事を知れた。  
体験を文字で残すのは、何もないよりすつ  
といい、そう思うようになった。読み手が  
そこから何を読み取るかはわからない。し  
かし、何かは確実に伝わる。

二〇一八年十二月、辻先生の故郷瀬戸内  
市邑久町豆田に行く機会があつた。旧姓松  
原、岡山藩の藩医の家で近隣では小兒専門  
医で有名であったらしい。祖母秀と共に十四  
歳まで松原家の家業を手伝い、御先祖の  
墓守をして暮らした。先生の記憶は鮮明で  
私は聞いたことをできる限り書き取った。  
十六歳で岡山の看護学校を終了した辻先  
生は小豆島にいたらしい。昭和十九年だっ  
た。生まれ故郷が小豆島だと知ると、父親  
を捜していたのかもしれないと思った。  
第二歌集『萬雀の歌』には次の二首があ  
る。

父搜し七十余年の生にして辻治に遇う香  
川先生に遇つ

## 花、小鳥そしてひと

三浦美代子

### 月の二人

無限花序のグラジオラスよ自らの重さに倒れ咲き尽くしたり  
二階への踊り場にいつも見るマリア内省ばかりで発展のなし  
「象潟や雨に西施が合歎の花」見上げて思わず子と唱和せり  
炊きだと話を切り上げ帰り行く農の暮らしに古語の残れり  
見る人の心に表情変えるのよ友は言いつつ花を撫でおり  
弟子となり教えを乞いぬ夫の手になりたる魔法のような甘酒  
毎日が淋しいという友が居て諾う嘘を隠していたり  
紺碧の入り江に並ぶ船に射す夏のひかりの眩しき白さ

ウクライナの歴史哀しくいつも聞く「小さなぐみの木」低くこもれる  
「おいしいね」と母と笑みしよただ一度茶房にケーキ食みしことの  
ほんとうのひとの哀しみわからざり孤独は体が痛いと君は  
外食のおまけのようにパンを買う遠まわりする海辺の店に  
今日の日の無事を感謝に心して「こらんよ空の鳥」歌うなり

快復へ

二十数年前、夫が単身赴任になった時、心が寂しくその寂しさが二年間ぐらい続いた。そのあいだどうしてこんなに寂しいのかと思っていた。物事への気力はなく軽い鬱病であったのかもしれない。そして十二月の三十日だったと思うが、なにか胸の中よりストンと落ちるのがはっきりと感じとられ、そのつかえが取れた気がした。それは自律と自立の心がないからだと気づいた。そしてその寂しさからは解放された。が、気づいただけでその後も夫をはじめ両親、兄弟、友人に守られ甘えて来た。そして十七歳の今、これという特技もなく、その日その日を忙しく過ごし、自分は一体何をして来たのかと思うようになり、悲しくなる事がしばしばである。

そして最近、大江健三郎が老衰で亡くなつた。病氣でなかつた事に少し心が和らいでいる。いつよりか、大江の本を少し読みテークなどほとんど理解できないでいるものの、終わると温かな気持ちになり、読んでいる時も生きしていく上での心の支えになつてゐる気がする。少しでも健三郎の本を読み続けられるか、それが、自立の数歩になるかもしれないと思いつめている。

◆ 今月の二人・宮前英明作品評 ◆

右かすが ちか道大ぶつへ

宮前さんは、奈良市在住。春日グループの辻彌生さんのご近所で、春日原生林、柳生街道の一部である滝坂の道、新薬師寺や白毫寺方面へも歩いて行ける。

・今日もまた平城宮址にさしかかり近鉄電車の車窓より見ゆこの歌は、近鉄電車からの眺め。「今日もまた」とあるところを見ると、通勤に電車を使っているのかもしれない。電車の車窓から平城宮址が見えたことによって、そこにさしかかったことが分かったのだろうが、「平城宮址にさしかかり」「車窓より見ゆ」というのは、なんだか懐れたような表現で、そこが妙な味わいになっている。

・ヤマドリは万葉のころ文字になり希に会うのはその子孫なり万葉集にヤマドリを詠った歌がある。その頃からヤマドリはいて、今まれに会うことができるはその子孫なのだと、ヤマドリを介して遙かな時が巡っている。

・五条野の植山古墳の石棺は祖父とおんじ阿蘇ピンク石植山古墳は、相原市五条野町にある。推古天皇とその子息竹田皇子の合葬墓と推定されているらしい。そこから出てきた石棺は阿蘇ピンク石で、それは祖父の墓と同じだと言うのだろう。古墳時代の石棺が祖父によって急に身近なものになる。

・高円の野辺にうすまる道標 右かすが ちか道大ぶつへ  
高円山の麓、白毫寺のあるあたりにある道標か。古い道標の文字の「右かすが ちか道大ぶつへ」漢字とかなの表記の仕方と、野辺に埋まっている様が、歴史を感じさせるとともに、道を辿った人々の暮らしも想像させる。

◆ 今月の二人・三浦美代子作品評 ◆

無限花序のグラジオラス

評者・久我田鶴子

三浦さんは、銚子市在住。この三月に亡くなつた大江健三郎の本を読むことが心の支えになつてゐると言う。

・無限花序のグラジオラスよ自らの重さに倒れ咲き尽くしたりグラジオラスの花は、下から上へと咲きのぼるにつれ、自らの重さに傾き、ついに倒れる。それでも、そうやって咲き尽くした。「咲き尽くしたり」に、作者の感嘆の念が溢れる。

・炊きたと話を切り上げ帰り行く農の暮らしに古語の残れり「炊き」とは、飯の文度。「炊く」という動詞が名詞化した言葉である。「炊ぐ」のほうが馴染みがあるかもしれないが、室町時代では消音だったそうで、「炊き」よりも「炊き」のほうが古い形を残している。農の暮らしの中にはまだそういう古い言葉が残つてゐる、ここにも作者の感嘆の念がある。

・見る人の心に表情変えるのよ友は言いつつ花を撫でおり花は、見る人の心によつて表情を変える。そう言いながら、友は花を撫でている。作者は、この友の言葉としぐさに納得したのかどうか。感情を差し挟まず、ここでは表現している。

・ほんとうのひとの哀しみわからざり孤独は体が痛いと君は「ほんとうのひとの哀しみ」は分からぬ、と言う。その人（君）は、「孤独は体が痛い」と言うだけれど。心の問題が心に留まらず、体の痛みにもなつて現れるということ。分かるような気もある。でもやはり、簡単に分かるとは言えない。

・外食のおまけのようにパンを貰う返まわりする海辺の店に「外食のおまけのように」「遠まわり」いつもとはちょっとだけ違うことが、いかに気分を変えてくれることか。

小学校教員として三十七年間勤務し、定年退職した十年前のこと。「これから時間、自分のためにたっぷり使いたい」「日々の生活を充実したものにしたい」と思っていたとき、福島市主催の「短歌入門講座」の案内が目に入った。それまで短歌は自分とはかなりかけ離れたものという気がしておらず、けれども、入門講座ということで、やさしく教えていただけるかも知れない期待して申し込んだ。

講師は朝倉富士子さんという方だった。お連れ合いを亡くされたばかりと言う。お辛い時であろうに、短歌の歴史から特徴まで分かりやすく丁寧にお話しくださった。

後半、実際に作ってみることになり、身近なできごとや心に残っていることを何とか三十一音にした。その時、短歌がぐっと身近なものに感じられた。

その年の秋に、藤田美智子さんが福島県文学賞短歌部門の正賞を受賞した。彼女と高校の同級生で、若いときから作文教育研究会で共に学んできた仲間だ。授業実践などで彼女から教わることが多かったが、短歌をやっていることは全く知らずにいたのでとつても驚いたのだった。

早速、藤田美智子さんに「私に短歌教えて」と話すと、大歓迎との返事で、「地中海」

誌を見させてくれた。こんなにたくさんの方が短歌をやっているのかと驚いた。

最初は、行きつけの喫茶店で、個別に見えてもらっていたが、やがて一人増え二人増えして昭和二十八年生まれの仲間が五人となってしまった。

入会した「新樹の会」は毎月郡山市で会をしていた。福島から在来線で約五十分。



その間、電車通学の女子高生気分でのおしゃべりもまた楽しかった。ある時、六十歳を前にして亡くなった叔父の話をした。長男を自死で亡くしたあと、叔父が短歌を詠んでいたように記憶していたからだ。すると美智子さんが、「歌は亡くなつた人の魂を鎮めると同時に、詠う人の魂をも鎮めてくられると言われている」と教えてくれた。ど

うしようもない悲しみ・苦しみを叔父は何とか三十一音に込めようとしていたのかもしないと、その時気づいた。

入会した平成二十七年十月、郡山市で福島県短歌祭が開かれた。講師が久我田鶴子さんということもあり、美智子さんに勧められ、何も分からないながら参加した。

午前午後にわたって、久我さんが三百首を超える歌を精力的に評されていて、感心してしまった。久我さんが編集長をされている「地中海」に入会したことが誇らしくも思えた。当日の詠草には、大震災から四年経ち、故郷を離れ避難者となつた苦惱の歌、原発事故後の風評被害に負けまいとする梨農家の歌、除染に励む若者の姿を捉えた歌。どのページにも福島の「今」を詠んだ歌があった。日常の暮らしの中での心情や発見、過去のこと未来のこと、何でも詠つていいのだ。今でなければ詠えないこともあるのだ。そんな思いを強く抱いて帰路についた。

あれから約十年。わずか三十一文字の中に自分の思いを詠う。その歌を仲間で読み合ひ、共感したりその人なりの人生に触れたりできる楽しい歌会がある。短歌に出会つたことで、退職後が充実した日々となつて